第１章　人口ビジョン

資料No.2

勝山市人口ビジョン（案）

～はじめに～

人口減少社会を迎えて

日本の人口は平成 20（2008）年に初めて減少に向かい、今後は若年人口の減少と老年人口の増加が加速度的に同時進行していくため、2040 年代には毎年 100 万人が減少していくと推計されています。

特に、生産年齢人口の減少により経済活動規模は縮小せざるを得ず、また高齢者の増加に伴う社会保障費の増加と相まって経済社会に多大な影響を及ぼすこととなります。

勝山市においても人口の減少が顕著に進んでおり、この状況が続けば、将来的に経済規模および住民サービスの深刻な縮小・低下を招きかねません。

この現状を踏まえ、政府は平成 26（2014）年 12 月に、国と地方が総力を挙げて地方創生と人口減少克服に取り組むための指針となる「まち・ひと・しごと創生長期ビジョン」と地方創生を目指す施策の基本的な方向や具体的な施策をまとめた「まち・ひと・しごと創生総合戦略」を閣議決定しました。

このことを受け、勝山市でも「勝山市人口ビジョン」を策定します。これは勝山市の人口の現状と将来の姿を示し、今後取り組むべき勝山市創生のための施策の方向性を探るツールとして作成したものです。

１．勝山市の現状

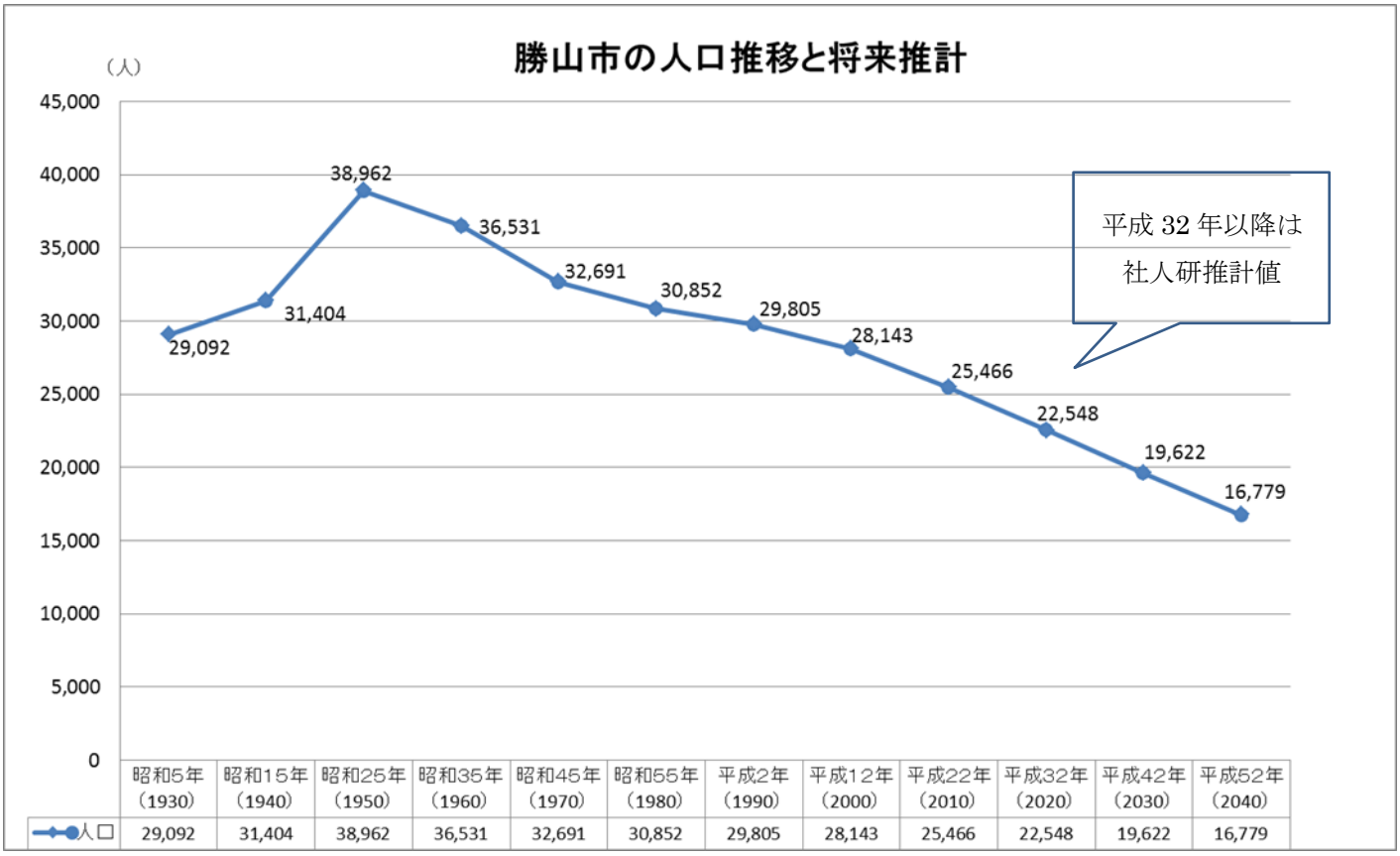
１．人口の推移と将来推計

勝山市は昭和 29（1954）年 9 月 1 日に 1 町 9 箇村が合併し、市政を施行しました。

終戦後、勝山市に疎開していた人たちが都市部へ戻り始めたものの、ベビーブームも到来し、合併前の昭和 25（1950）年の人口は 38,962 人でした。その後、日本経済の回復に伴い疎開者が都市に戻ったため、毎年 2,500 人以上が転出し、昭和 30（1955）年の人口は 37,556 人でした。転出超過による人口の社会減はこの後も続き、直近の国勢調査（平成 22 年 10 月実施）では、勝山市の人口は 25,466 人まで減少しています。

国立社会保障・人口問題研究所（以後「社人研」）が平成 25（2013）年 3 月に公表した推計では、平成 52（2040）年に 16,779 人まで減少するとしています。

社人研の推計では平成 27(2015)年の勝山市の推計人口は 23,999 人となっていますが、平成 27 年 10 月 1 日実施の国勢調査結果では、推計値よりも減少している可能性もあり、人口減少は今後も避けられない状況です。



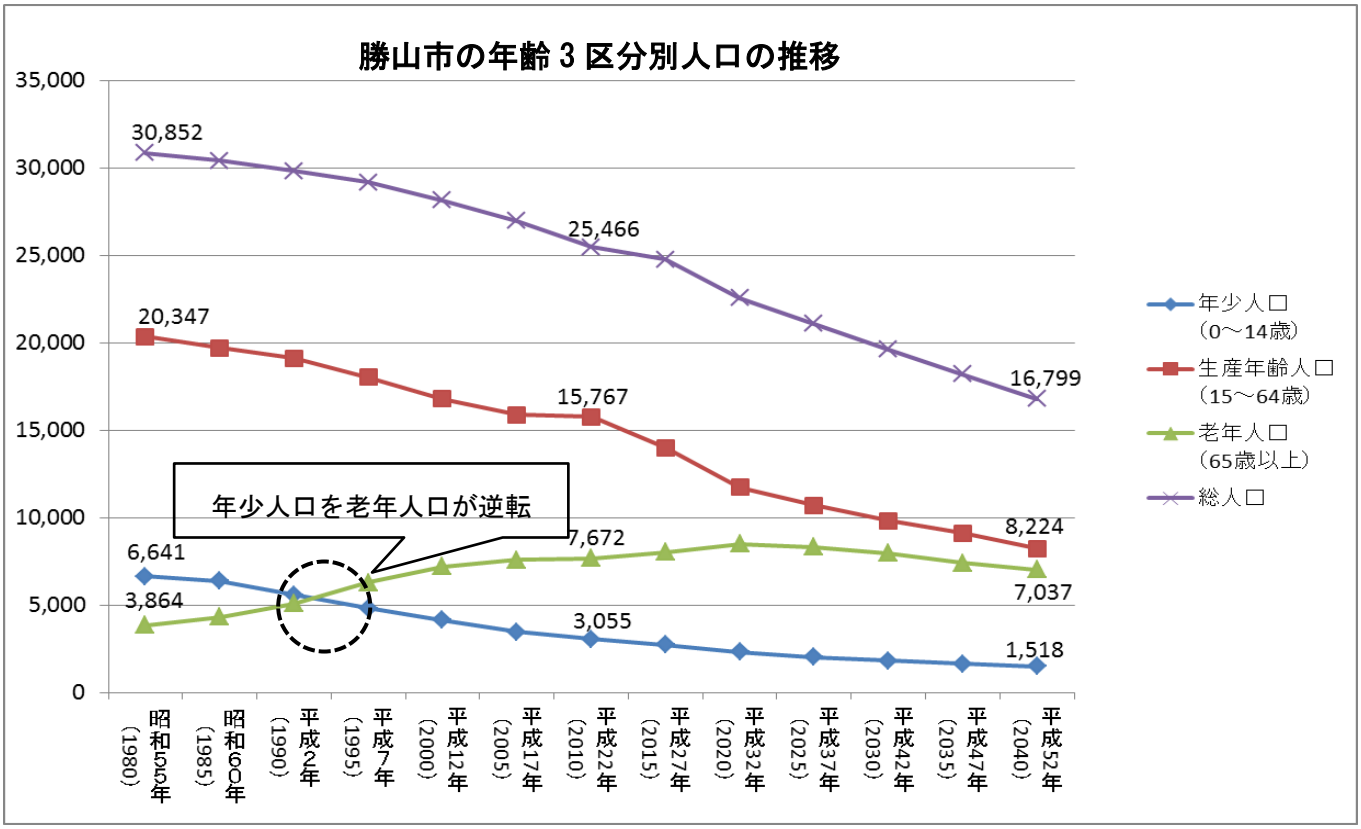
資料：平成 22（2010）年までは国勢調査、平成 32（2020）年以降は国立社会保障・人口問題研究所
日本の地域別将来推計人口（H25.3.27）※コーホート要因法による推計

※コーホート要因法

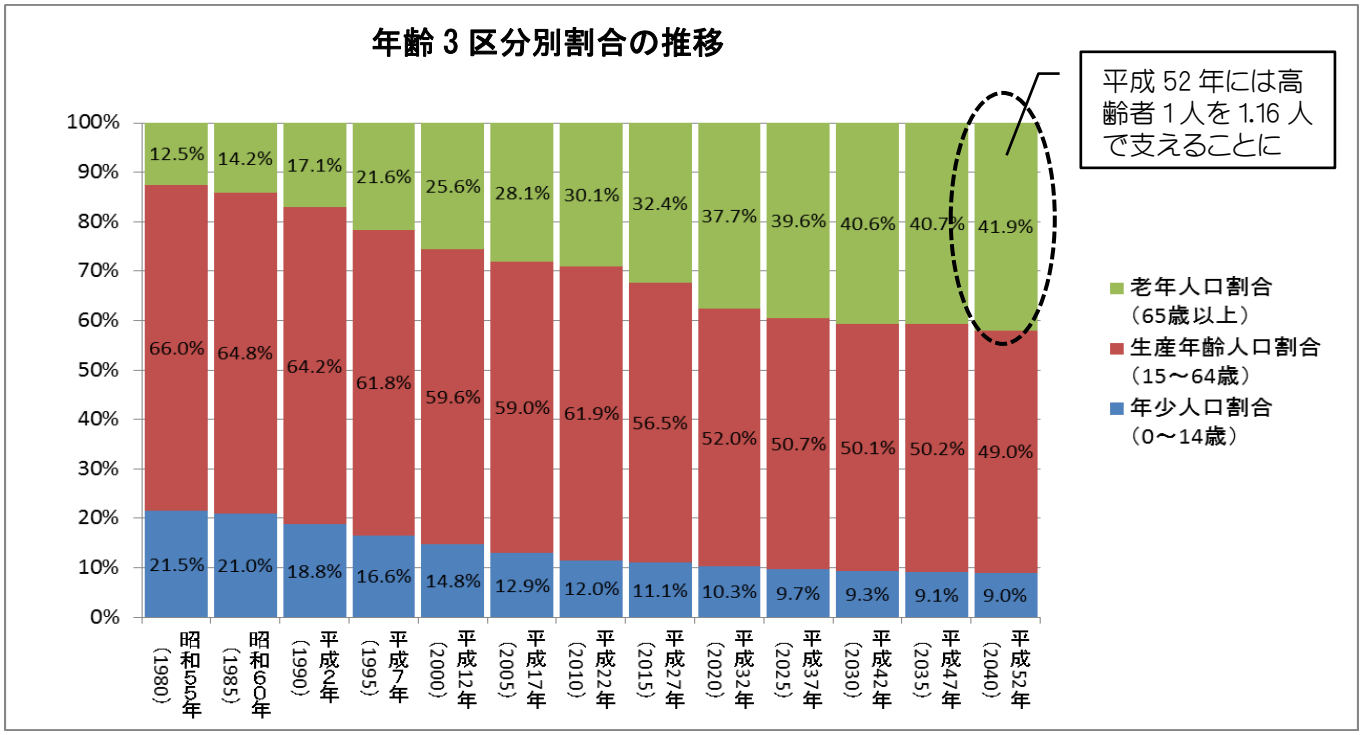
ある年の男女・年齢別人口を基準として、ここに人口動態率や移動率などの仮定値を当てはめて将来人口を計算する方法。5 歳以上の人口推計においては生残率と純移動率の仮定値を使用する。0-4 歳人口の推計においては生残率と純移動率に加えて出生率および出生性比に関する仮定値を使用する。

２．年齢３区分別人口の推移

勝山市の年齢３区分別人口は、生産年齢人口（15～64 歳）と年少人口（0～14 歳）ともに減少し続けていますが、老年人口（65 歳以上）は緩やかに上昇し、平成２（1990）年の時点で年少人口と老年人口が逆転します。以降その差は開き続けています。社人研の推計では平成 52（2040）年には勝山市の高齢化率は 41.9%に達します。



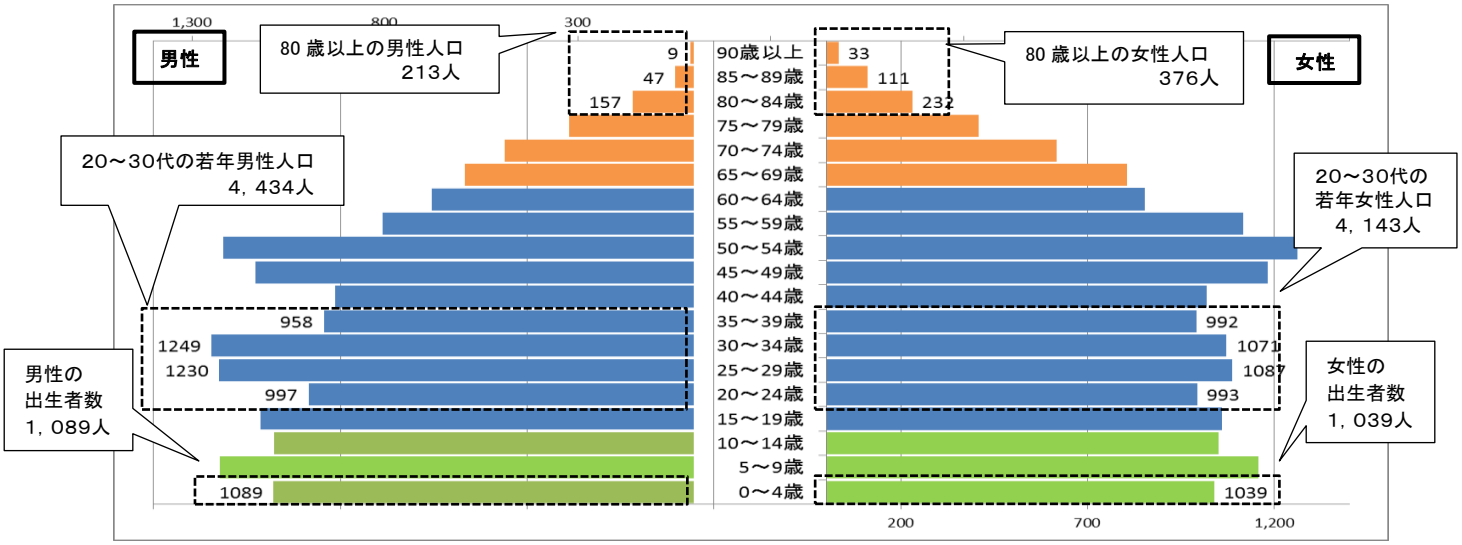
資料：平成 22（2010）年までは国勢調査、平成 27 年は住民基本台帳より、平成 32（2020）年以降は国立社会保障・人口問題研究所　日本の地域別将来推計人口（H25.3.27 公表）



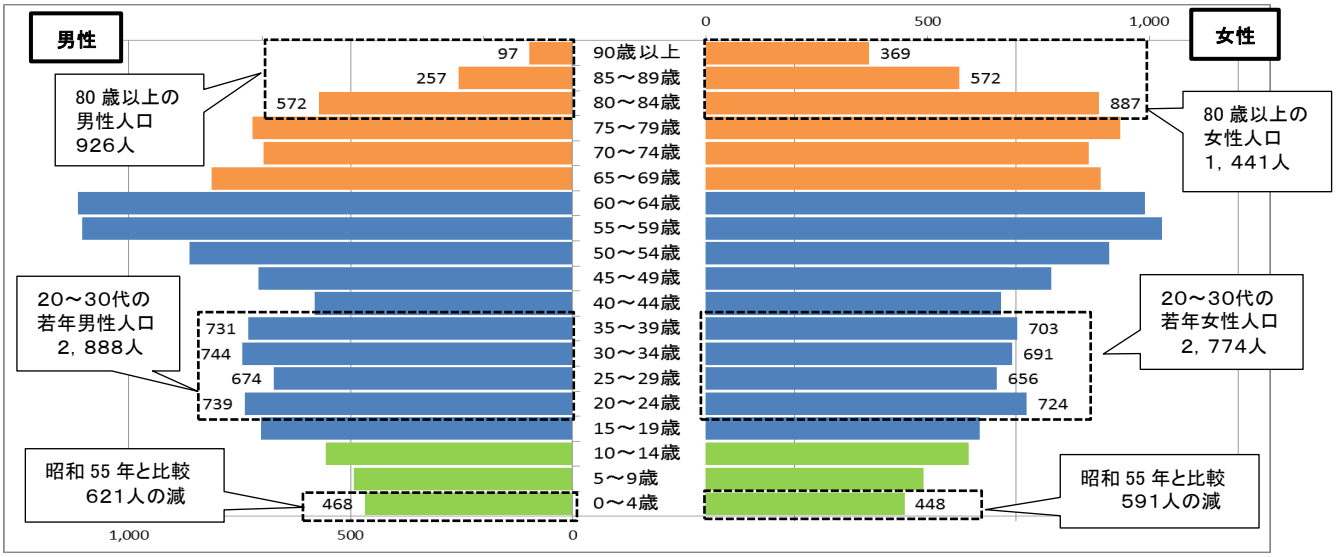
３．人口ピラミッドの推移

年少人口　生産年齢人口　老年人口

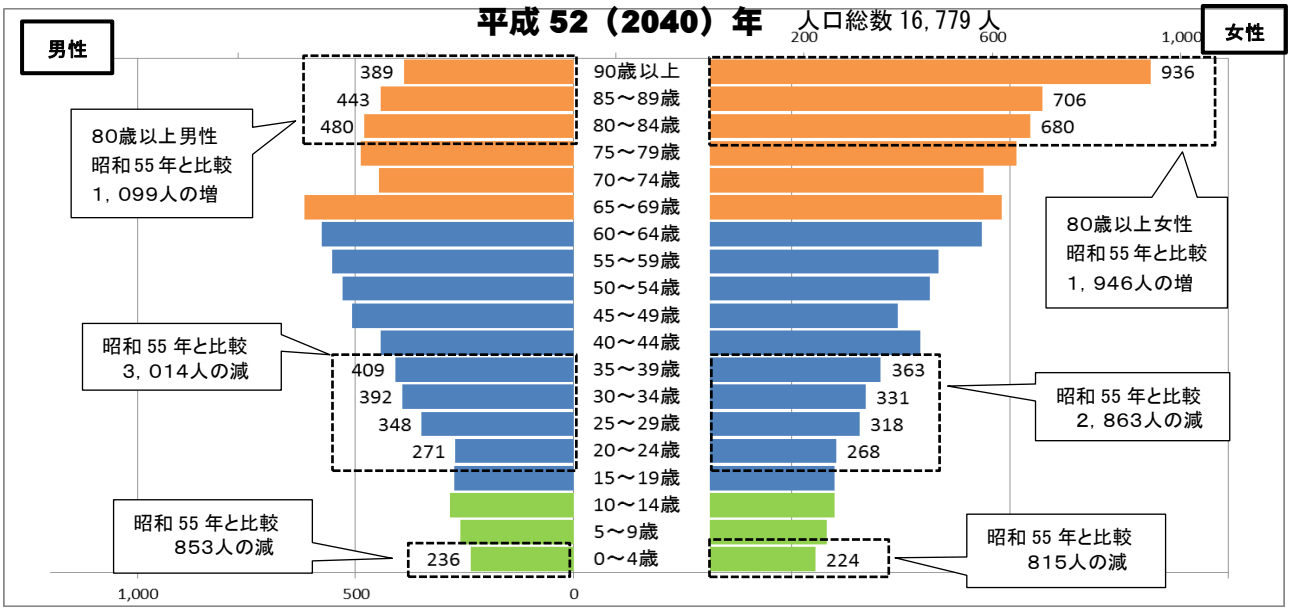
昭和 55（1980）年　人口総数 31,435 人　資料：上のグラフと同じ



平成 22（2010）年　人口総数 25,466 人



平成 52（2040）年　人口総数 16,779 人



資料：平成 22（2010）年までは国勢調査、平成 52（2040）年以降は国立社会保障・人口問題研究所
日本の地域別将来推計人口（H25.3.27 公表）

昭和 55（1980）年、平成 22（2010）年、平成 52（2040）年の人口グラフを比較してみると、昭和 55 年には年少人口と 20~30 代の若年人口が多く、老年人口が少ない「つりがね型」になっていましたが、平成 52 年には若年人口が大幅に減少し、老年人口が逆に大きく増加するため、平成 22（2010）年の「つぼ型」から逆三角形に近い型に変化しています。この 60 年間で、20~30 代の若年人口は男女合計で 5,877 人減少し、年少人口も男女合計で 1,668 人減少となっています。

逆に 80 歳以上の人口は 3,044 人増加し、特に女性の高齢化が顕著になります。

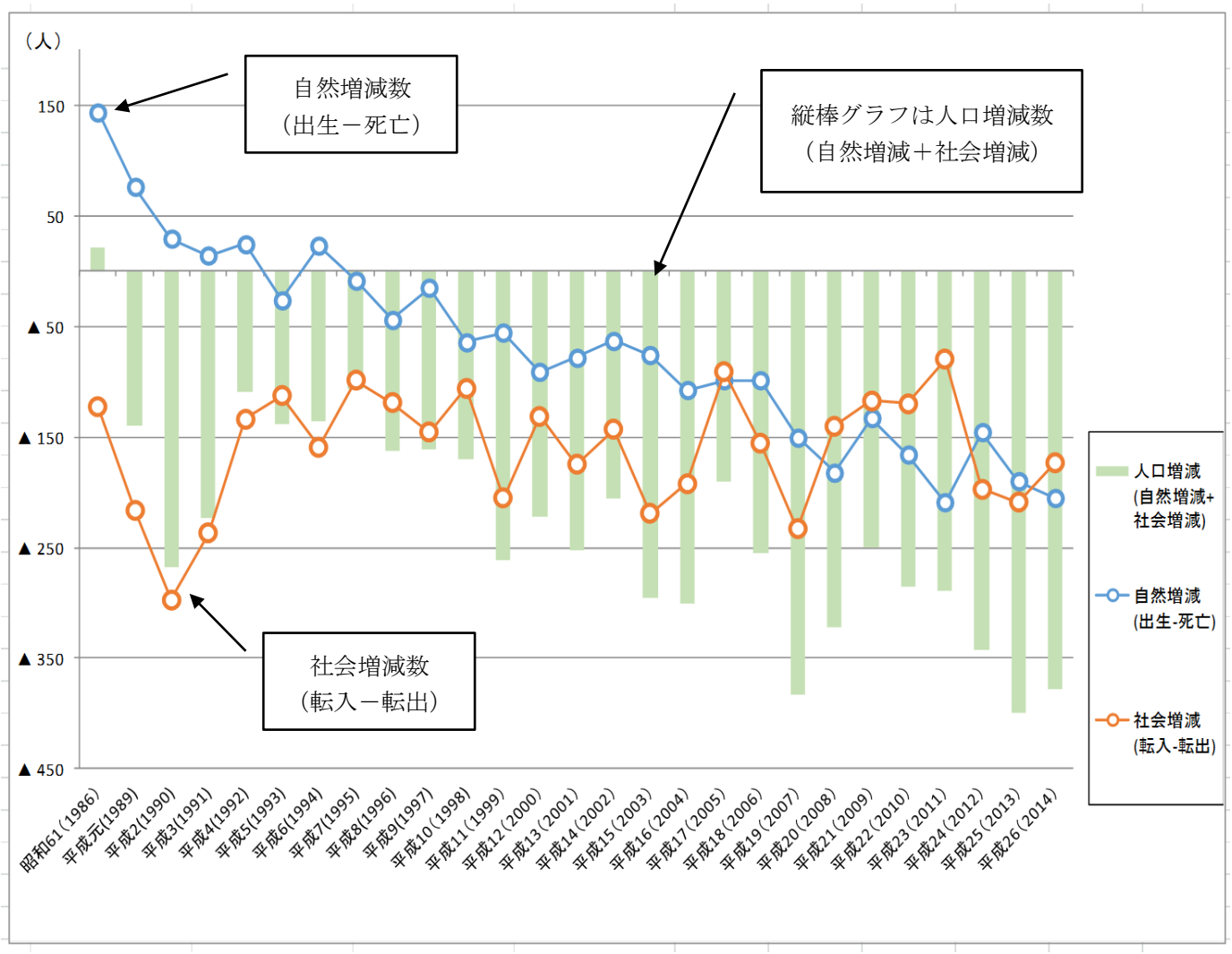
※平均寿命・余命について

女性の高齢化が顕著になる理由として、男女間の平均寿命・余命の違いがあげられます。「平成 25 年簡易生命表の概況」（厚生労働省　平成 26 年 7 月 31 日発表）によれば、平成 25 年に 60 歳の男性の平均余命は 23.14 年で、女性は 28.47 年となり、結果として 80 歳以上の人口では女性が多くなります。

４．人口増減の推移

勝山市の人口は昭和 25（1950）年の 38,962 人をピークに、それ以降は常に転入・転出の差による「社会減」で減少し続けている。さらに平成５年以降は出生・死亡の差による「自然減」が始まり、「社会減」の両方が同時進行することで、人口減少がさらに進んでいます。

勝山市の人口増減の推移（自然増減・社会増減）

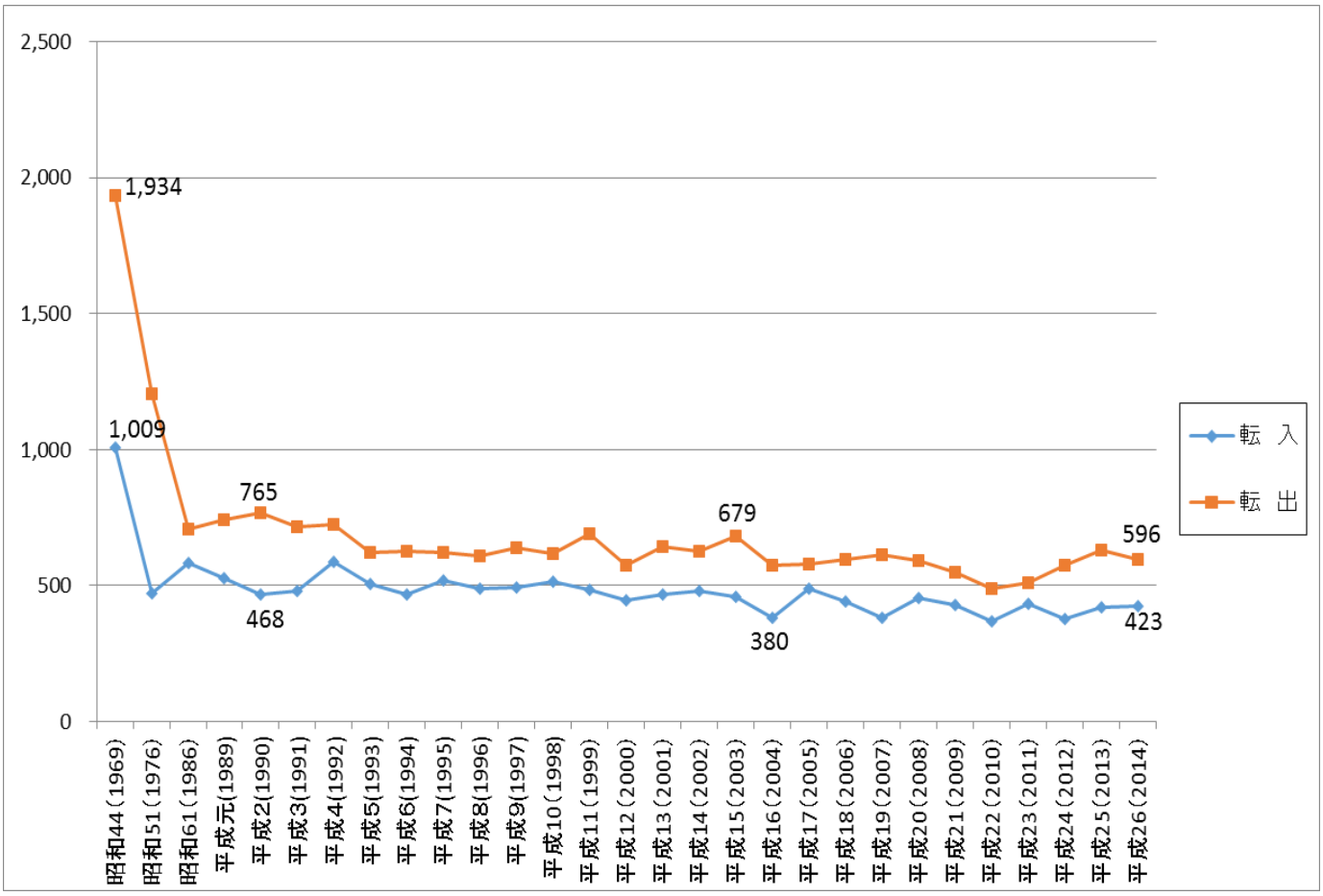


資　料：市民課（住民基本台帳より）

５．転入・転出数の推移

人口の社会動態である転入・転出の動きを見てみると、記録を開始した昭和 44（1969）年時点からすでに転出者が転入者を上回り続け、現在までこの傾向は続いています。平成 26（2014）年では転入数 423 人に対し転出数が 596 人で、173 人の「社会減」となっています。

勝山市の転入・転出数の推移



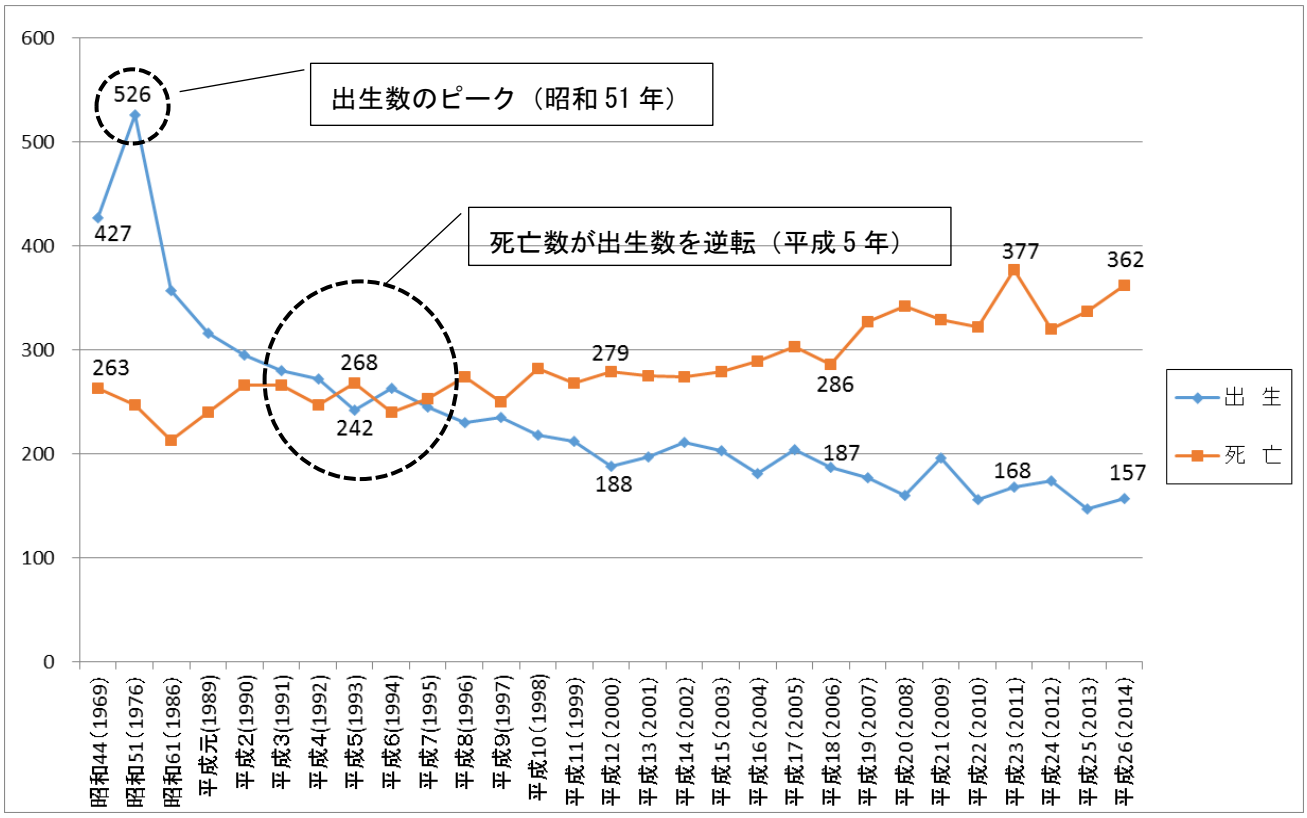
資　料：市民課（住民基本台帳より）

６．出生・死亡数の推移

人口の自然動態である出生・死亡数の推移を見ると、出生数は日本の高度成長期以降では、昭和 51（1976）年をピークに減少を始め、平成 5（1993）年に初めて死亡数が出生数を上回りました。平成 7（1995）年以降は常に死亡数が出生数を上回る「自然減」が続いています。

出生数は緩やかに減少し、死亡数は緩やかに増加しています。平成 26（2014）年には出生数 157 人に対し、死亡数は 362 人で 205 人の「自然減」となっています。

勝山市の出生・死亡数の推移



資　料：市民課（住民基本台帳より）

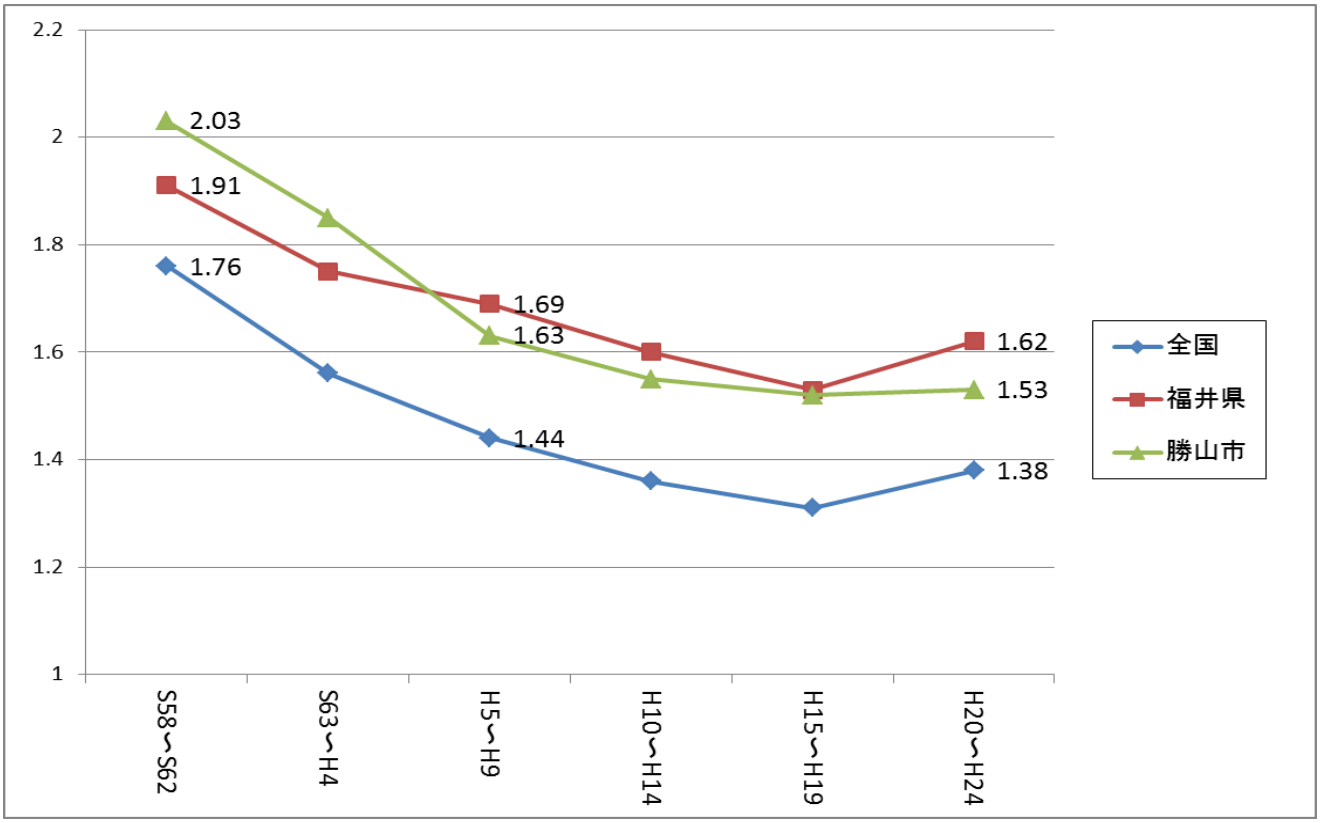
７．合計特殊出生率の推移

１人の女性が一生に産む子どもの人数とされる「合計特殊出生率」の推移をみると、昭和 58（1983）年～昭和 62（1987）年は 2.03 でしたが、これ以降は減少を続け、直近（平成 20 年～平成 24 年）では 1.53 となり、全国平均の 1.38 は上回っていますが、福井県平均の 1.62 より低くなっています。

人口を現状のまま維持するために必要な合計特殊出生率の水準は 2.07 で、勝山市の 1.53 との差を考えると、毎年必要な出生数が約 25%少ないことになります。

また、20～30 代の若年女性の人口が減っているため、合計特殊出生率の低下と相まって出生数の減少につながっています。

勝山市の合計特殊出生率の推移



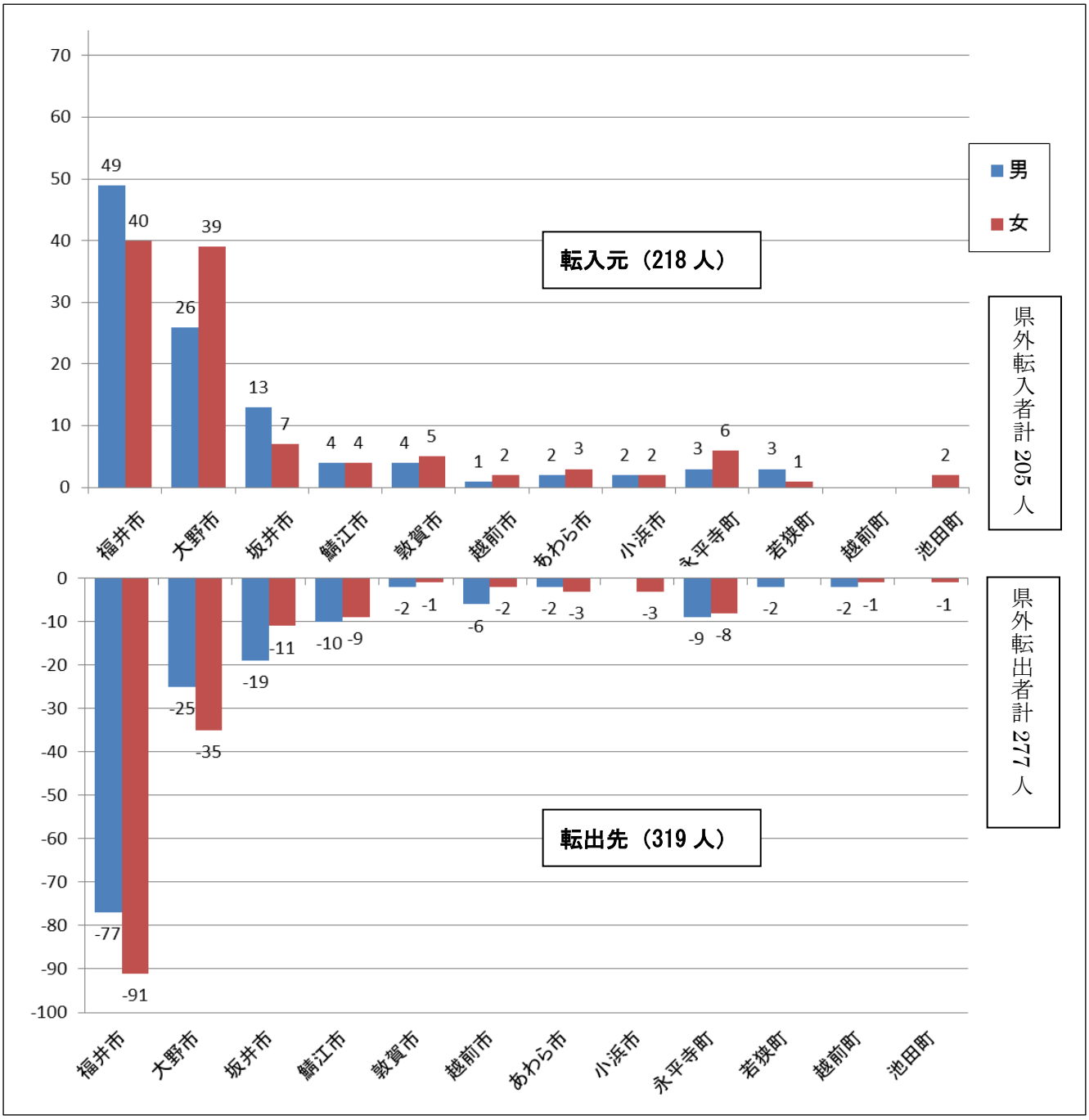
資　料：健康長寿課

８．転入元・転出先住所（県内）

平成 26 年度中の、県内他市町から勝山市への転入者数は 218 人で、転入元住所は男女ともに福井市（89 人）、大野市（65 人）からの転入が多くなっています。

逆に、勝山市から福井県内への転出者数は 319 人で、転出先は男女とも福井市（168 人）が多く、次いで大野市（60 人）、坂井市（30 人）となっています。県内においては福井市へ人口が集中する傾向にあると思われます。

平成 26 年度　転入元・転出先（県内）

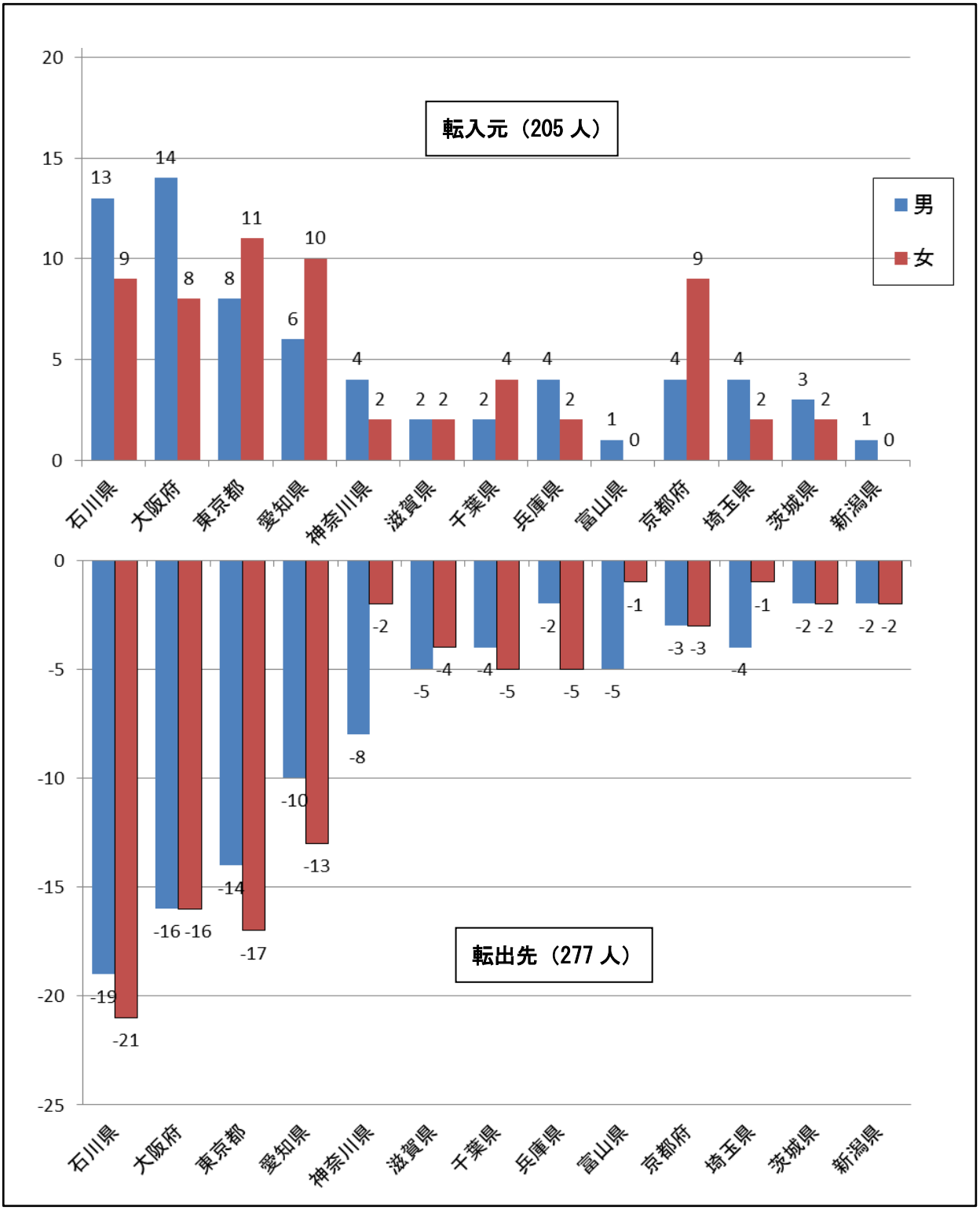


資　料：市民課

９．転入元・転出先住所（県外）

平成 26 年度中の県外から勝山市への転入者数は 205 人で、石川県、大阪府、東京都、愛知県、京都府からの転入が多くなっています。一方県外への転出者は 277 人で、石川県（40 人）が一番多く、次いで大阪府（32 人）、東京都（31 人）、愛知県（23 人）、神奈川県（23 人）が多く、大都市圏への転出が多いことがわかります。

平成 26 年度　転入元・転出先（県外）

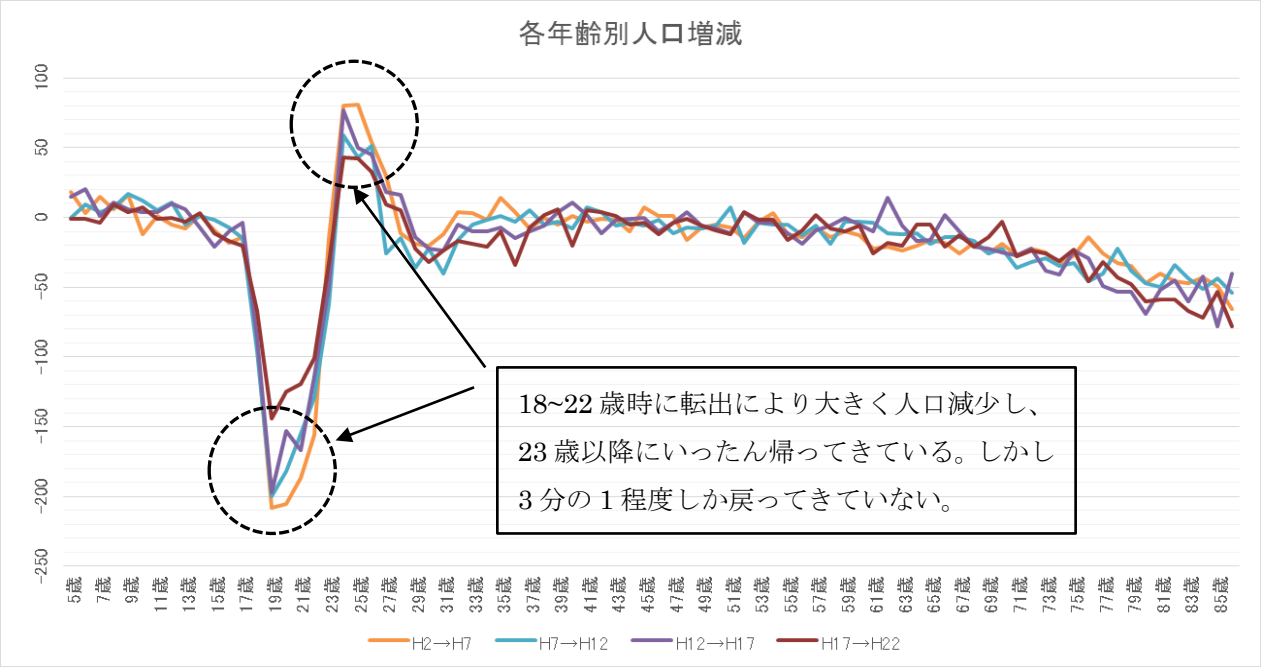


資　料：市民課

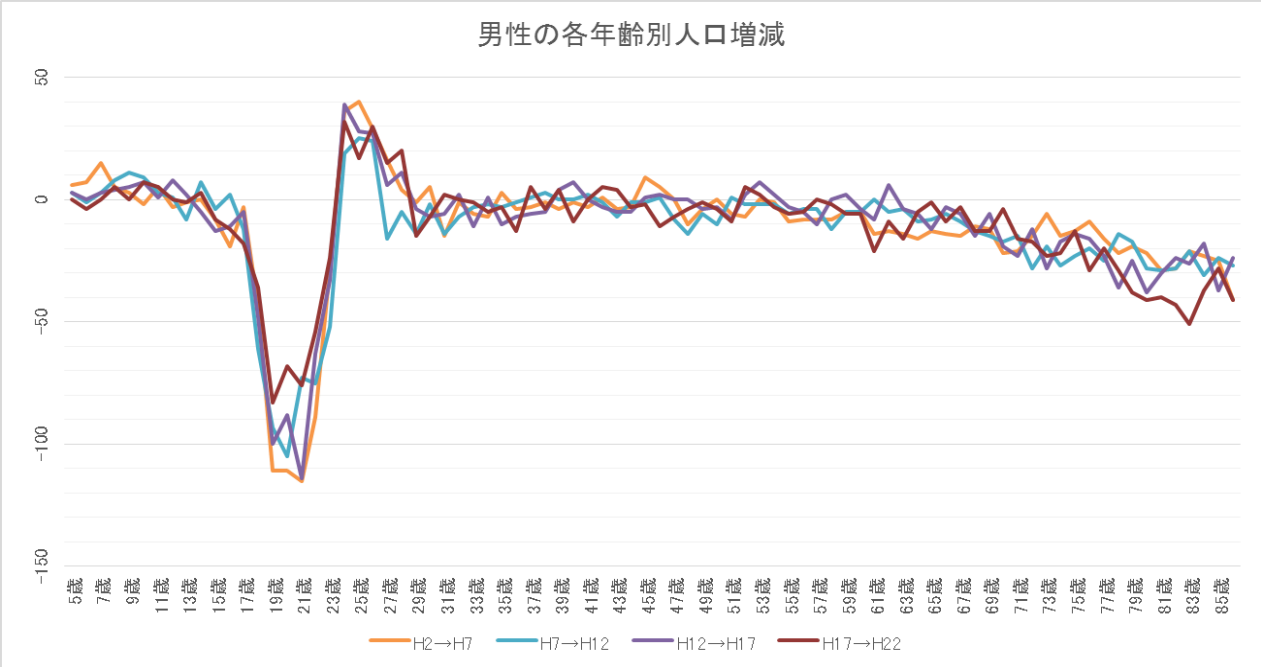
10. 年齢別人口推移

各年齢別の人口の増減（転入から転出を引いた数）を５年間隔でグラフ化してみると、平成７（1995）年から平成 22（2010）年までの国勢調査時の数値で、18～22 歳の人口が大きく減少し、23 歳から 25 歳の間にいったん増加します。これは地元に大学・専門学校等がないため、市外・県外へ進学のため転出し、卒業後にいったん戻ってきていると考えられます。

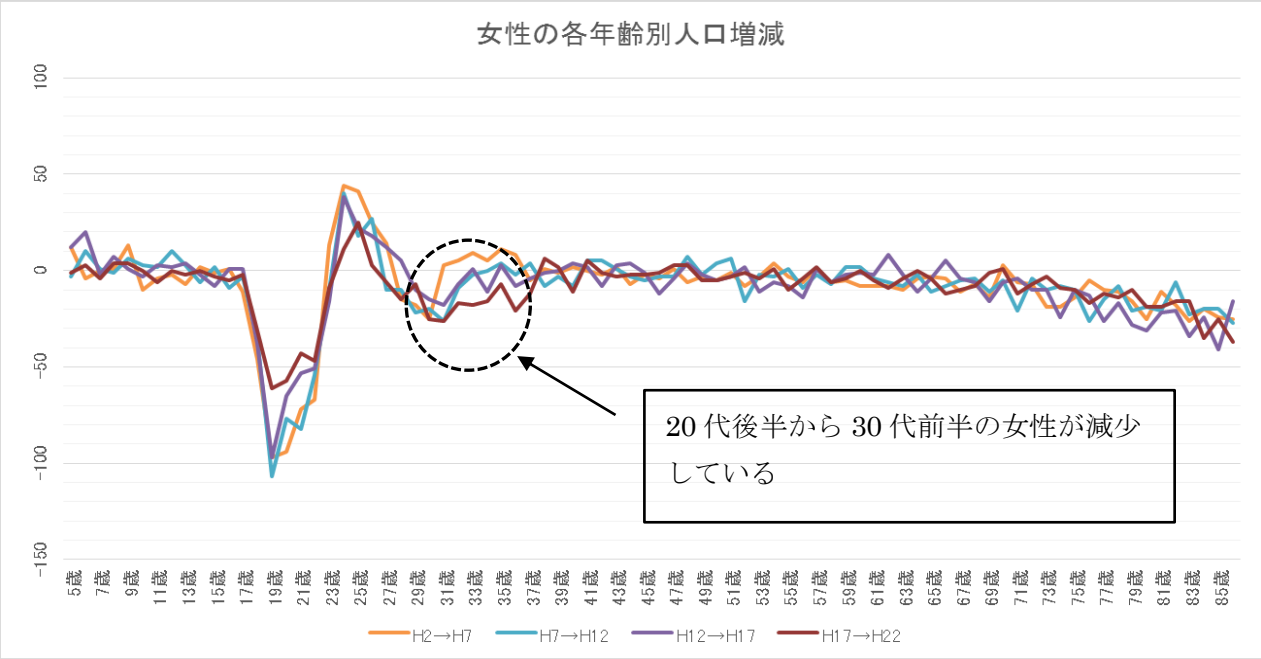
しかし、転出後に戻ってきている数は約３分の１程度でしかなく、これが勝山市の人口減少の大きな原因となっています。また、20 代後半から 30 代前半の女性の減少が顕著に現れています。



資　料：国勢調査

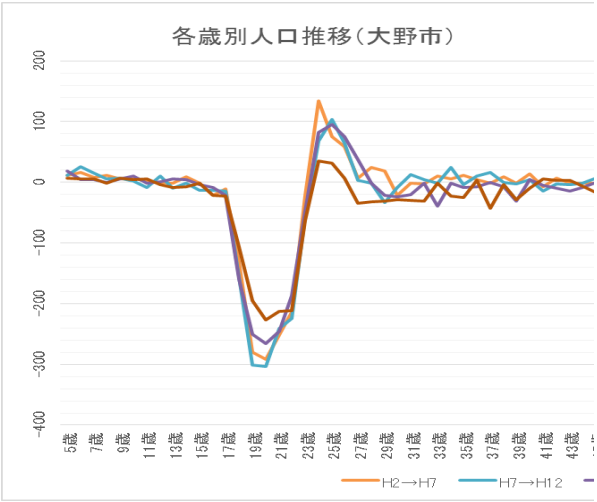


資　料：国勢調査



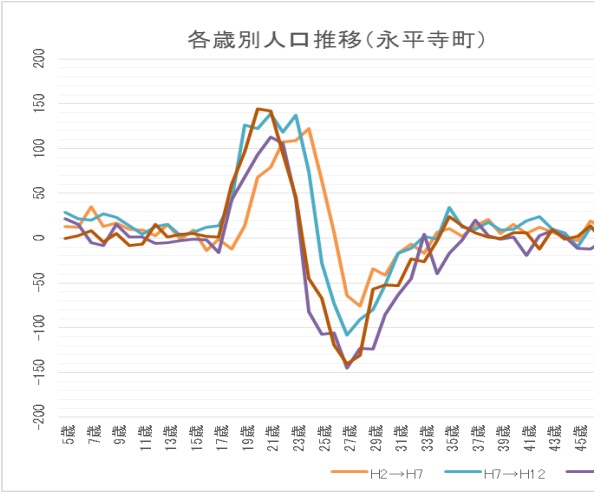
資　料：国勢調査

※参考　大野市



大野市の年齢別人口増減を見ると、勝山市と同じく 18～22 歳人口が大きく減少し、その後の増減もほぼよく似た傾向となっています。ただし転出数が勝山市より多く、人口減少の幅が勝山市より大きくなっています。また、勝山市と同じく 20 代後半から 30 代前半の女性の減少も大きくなっています。

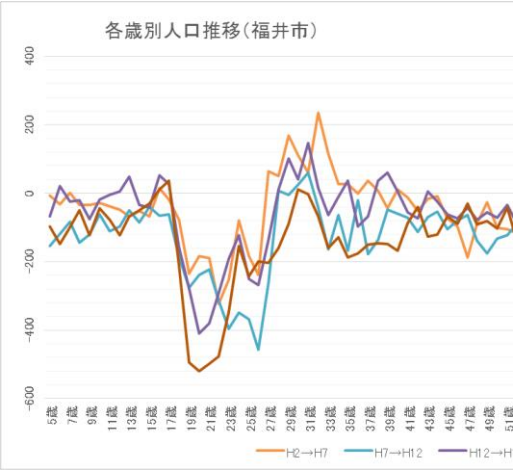
※参考　永平寺町



永平寺町においては、福井大学医学部と県立大学が近い立地条件により学生の流入があることから、勝山市とは逆に 18～22 歳の人口が増加し、23 歳以降に一気に減少する形になっています。その後は緩やかに減少していきます。

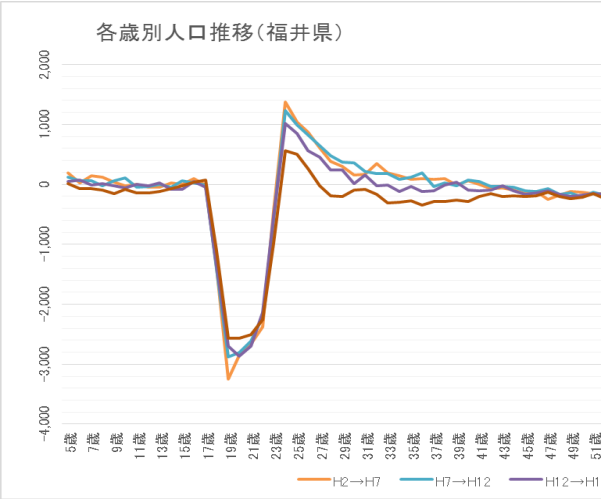
資　料：国勢調査

※参考　福井市



福井市では18歳から27歳の間で大きく転出超過となり、その後も転出超過が進みます。
H17～H22の間では30代の転出超過が見られます。

※参考　福井県



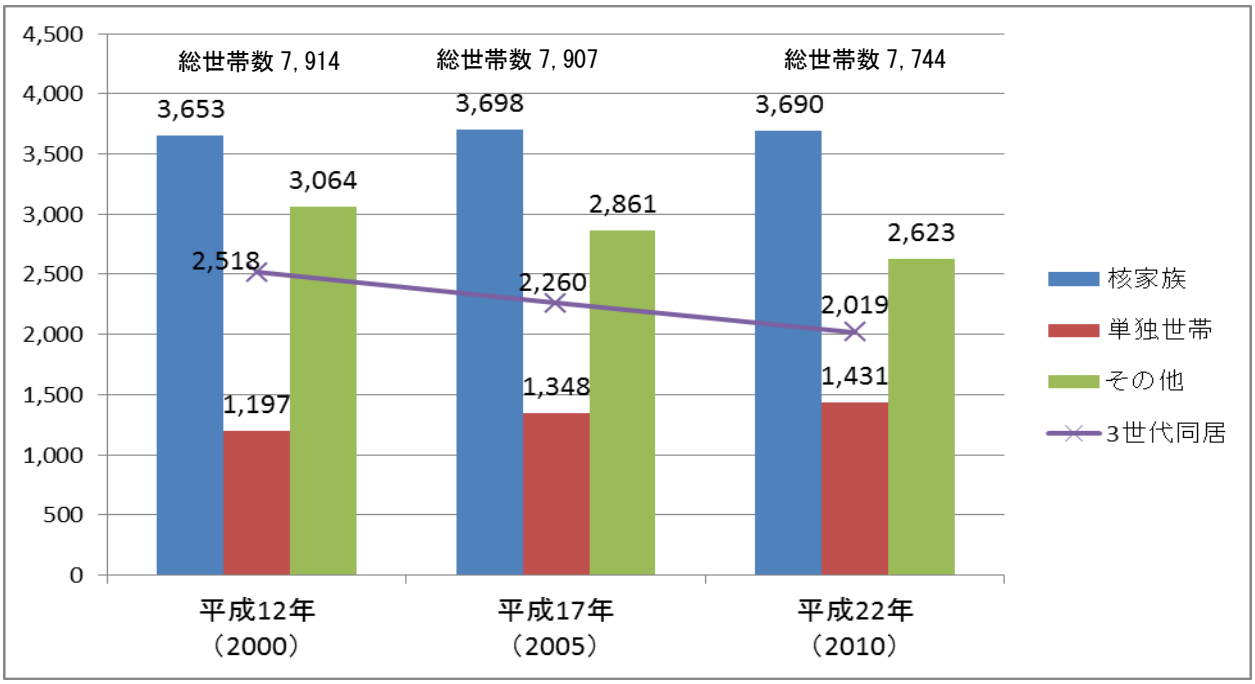
福井県全体では、やはり18～22歳人口が大きく減少し、23歳以降で戻ってくる人も大きく減っています。特にH17～H22間では約２割程度しか戻ってきていないことがわかります。また、20代後半から30代の若い世代の減少が目立ち、近年人口減少が加速している傾向が明瞭に現れています。

11. 世帯の家族類型別一般世帯数の推移

世帯数では、核家族世帯はほぼ横ばいながら、単独世帯はこの 10 年間で約 20%増加しています。また 3 世代同居世帯は約 20%減少しています。

勝山市の高齢化率が上昇していることから、単独世帯、核家族世帯の高齢化も同時に進んでいると思われます。

世帯の家族類型別一般世帯数の推移



定　義：単独世帯＝一人で生活している者
　　核家族世帯＝夫婦のみ、夫婦とその未婚の子女、父親または母親とその未婚の子女
資　料：国勢調査より

12. 昼間人口の動態（15 歳以上）人口

平成 22（2010）年の国勢調査では、市外から勝山市へ通勤・通学している人数は 2,178 人で、大野市からの人数が圧倒的に多く（1,441 人）、次いで福井市、永平寺町、坂井市となっています。

逆に市外へ通勤･通学している人数は 4,554 人になり､流入数の約 2 倍となっています。通勤・通学先としては福井市が一番多く（2,182 人）、次いで大野市、永平寺町、坂井市となっています。

通勤・通学に関しても流出超過となっていて、勝山市内の昼間人口が約 2,000 人減っていることになります。

勝山市の市町村別流入・流出（15 歳以上人口）　平成 22 年 10 月 1 日現在

市町名	流入			流出		
	総数	就業者数	通学者	総数	就業者数	通学者
総数	2,178	2,077	101	4,554	4,053	501
県内総数	2,157	2,057	100	4,397	3,957	440
福井市	283	276	7	2,181	1,909	272
大野市	1,441	1,378	63	1,216	1,122	94
永平寺町	254	225	29	437	393	44
坂井市	135	135	―	376	367	9
あわら市	12	12	―	60	60	―
鯖江市	19	18	1	54	46	8
越前町	7	7	―	51	39	12
その他の市町	6	6	―	22	21	1
県外総数（通勤･通学）	21	20	1	157	96	61

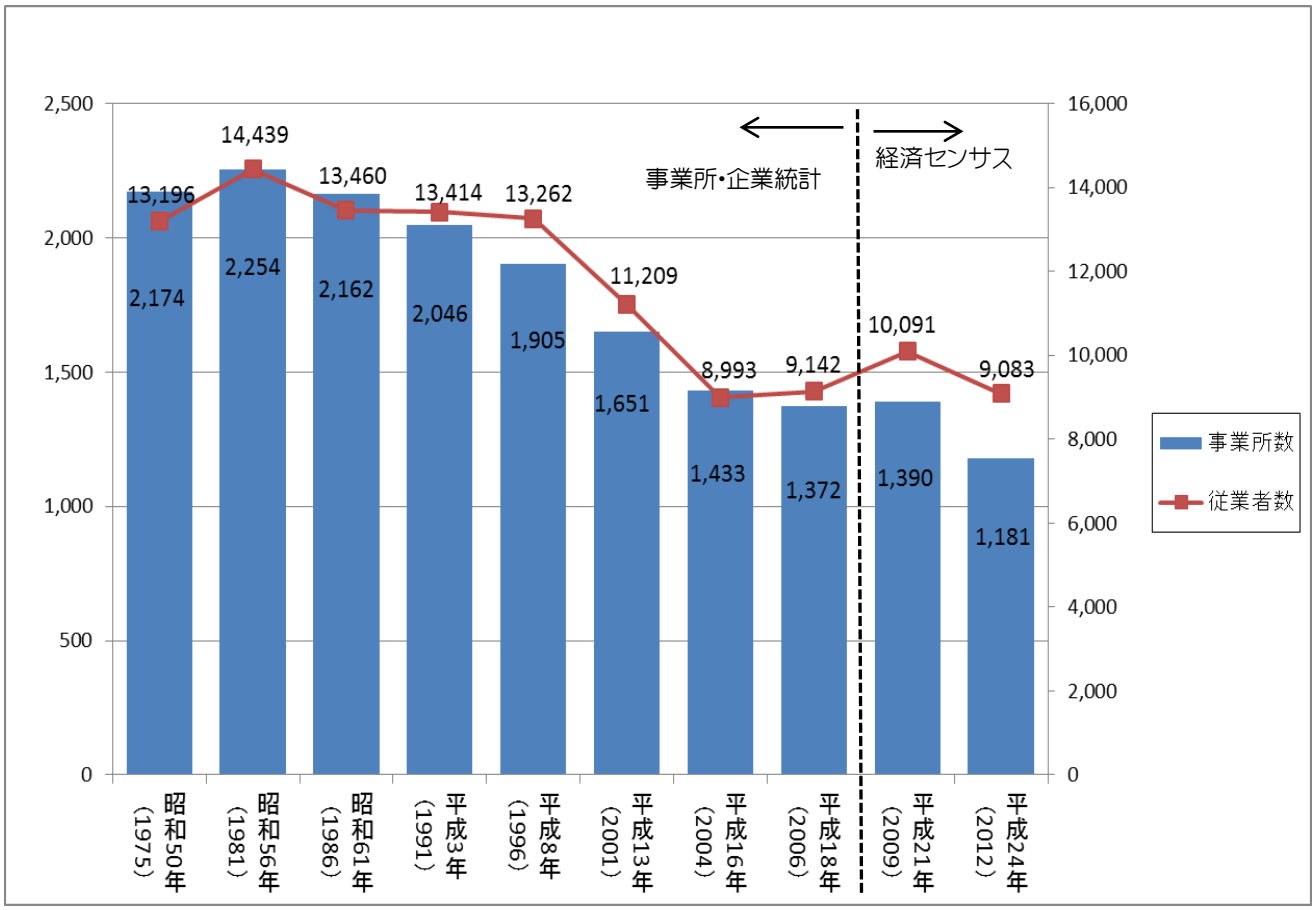
資　料：平成 22 年国勢調査

※参考　事業所数と従業者数の推移

勝山市内の事業所数・従業者数は、昭和 56（1981）年をピークに減少を始め、日本のバブル経済終焉期に当たる平成 3（1991）年ころから事業所数・従業者数ともに一気に減少します。ピークだった昭和 56（1981）年と比較すると、平成 16（2004）年には事業所数が 821 件（▲38%）減少し、従業者数も 5,446 人（▲36.5%）減少しています。平成 24（2012）年には事業所数は 1,181 件にまで減少しています。

事業所数の減少は勝山市内での就業の難しさを示し、「ひと・もの・しごと」の流れが勝山市に足りないこともよくわかります。

勝山市の事業所数と従業者数の推移

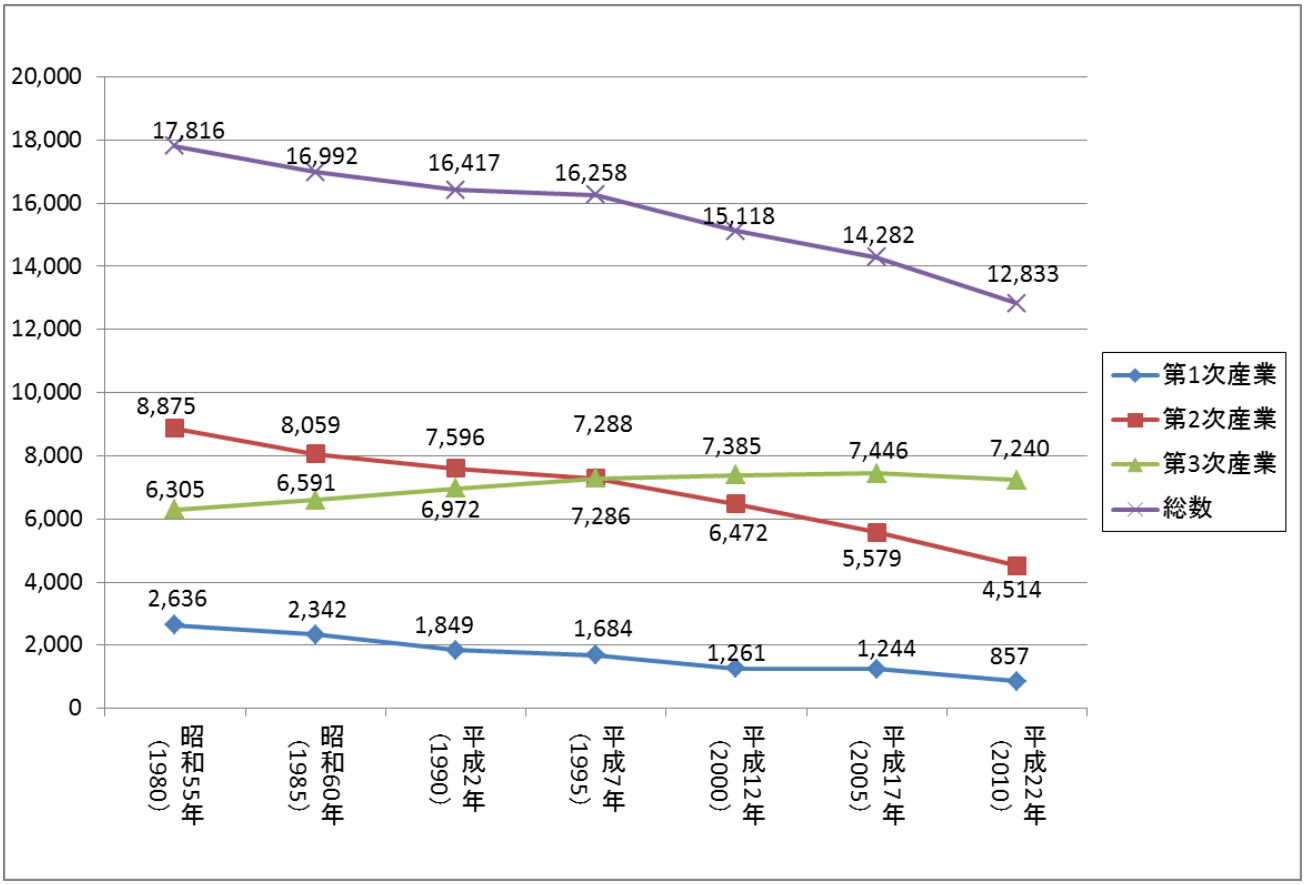


資　料：平成 18 年までは事業所・企業統計調査、平成 21 年は経済センサス基礎調査、平成 24 年は経済センサス活動調査

※参考　産業別就業人口

勝山市の産業別就業人口を見てみると、第 1 次産業従事者は昭和 55（1980）年から平成 22（2010）年までの 30 年間に 3 分の 1 にまで減少しています。第 2 次産業も 30 年間で半減しており、平成 7（1995）年ころに第 3 次産業の就業人口に逆転されています。第 3 次産業就業人口については平成 7（1995）年頃からほぼ横ばいとなっていますが、全体の就業者数は減り続けています。

勝山市の産業別就業人口



資　料：国勢調査

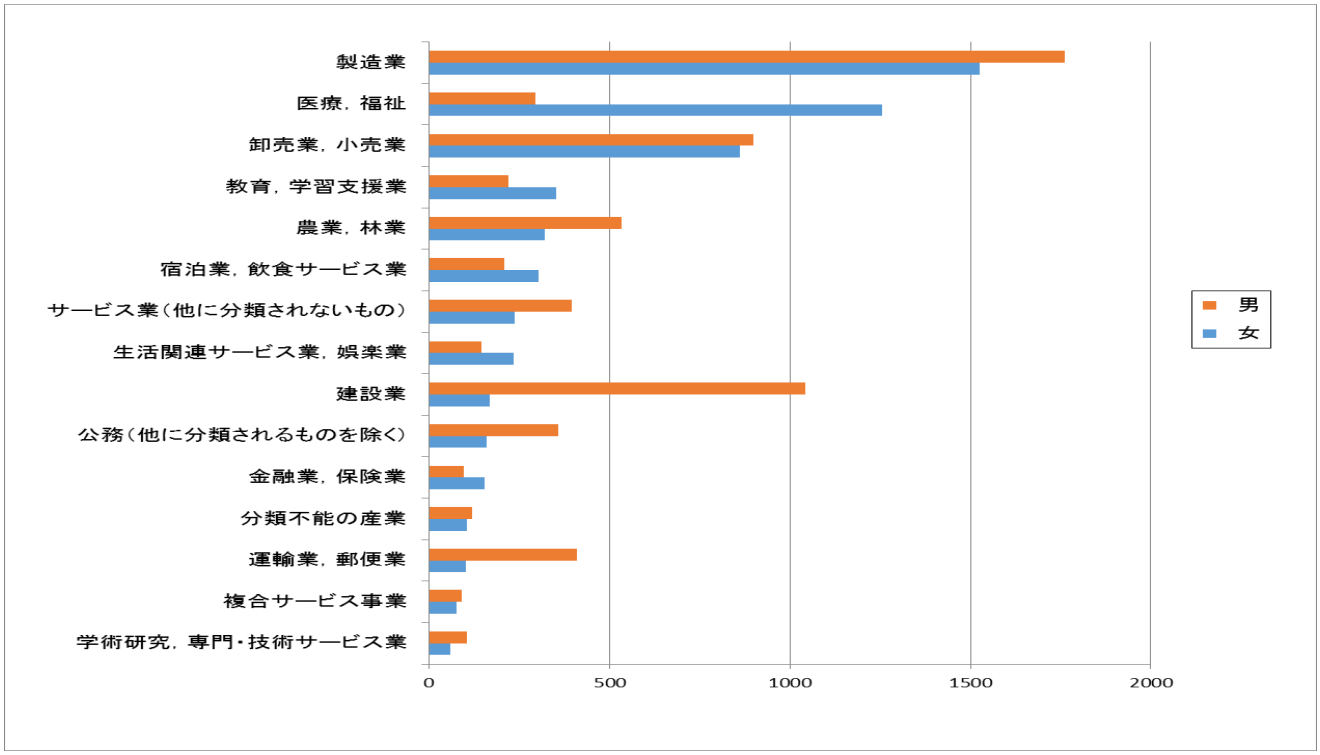
※参考　男女別産業人口

主な産業別に男女別就業者数をみてみると、男女とも製造業および卸売業・小売業の従事者が多くなっています。

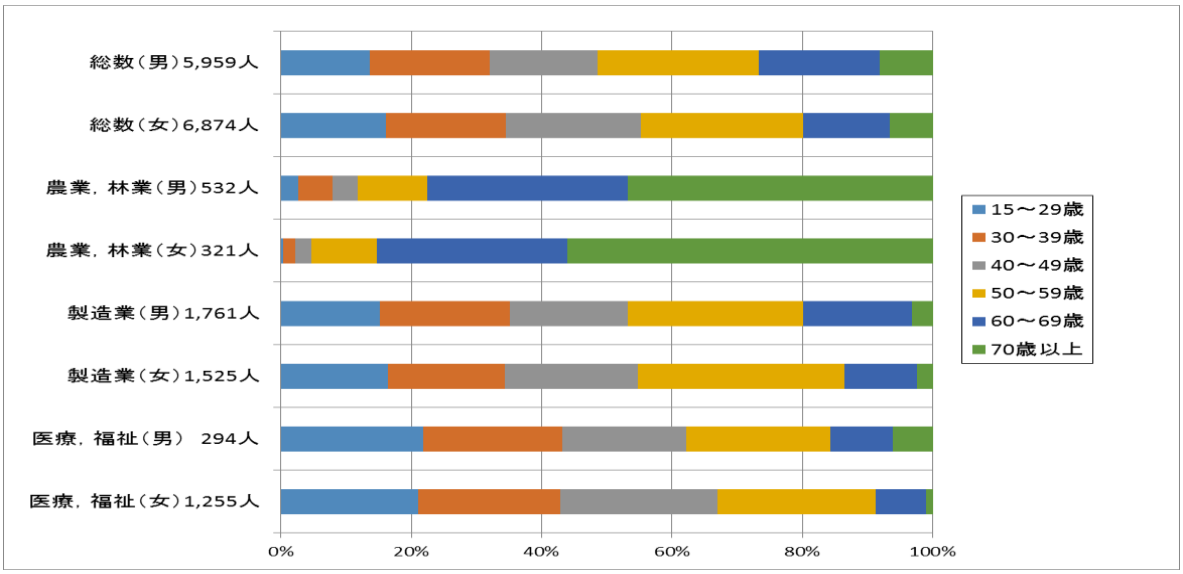
また、男性は建設業に従事している人も多く、女性は医療・福祉関係の従事者が圧倒的に男性より多くなっています。

産業別年齢構成では、農林業従事者の高齢化が顕著に進んでいます。

勝山市の産業別人口（男女別）



勝山市の産業別年齢構成（男女別）



資　料：平成 22 年国勢調査

13. 仮定値による将来人口の推計

国の長期ビジョンでは平成 72（2060）年時点で日本の総人口１億人を維持するという目標を設定しています。当市としては３つの仮定値を用いて 2060 年までの将来人口を推計しました。

①パターン１（推計人口）

国立社会保障・人口問題研究所推計値（平成 25 年３月公表）

②パターン２（推計人口＋出生率上昇）

合計特殊出生率を国の目標値に合わせ、平成 37（2025）年 1.80、平成 42（2030）年から平成 72（2060）年まで 2.07 を維持すると仮定。ただし現在の社会増減（転入・転出）の状況が続くと仮定した場合

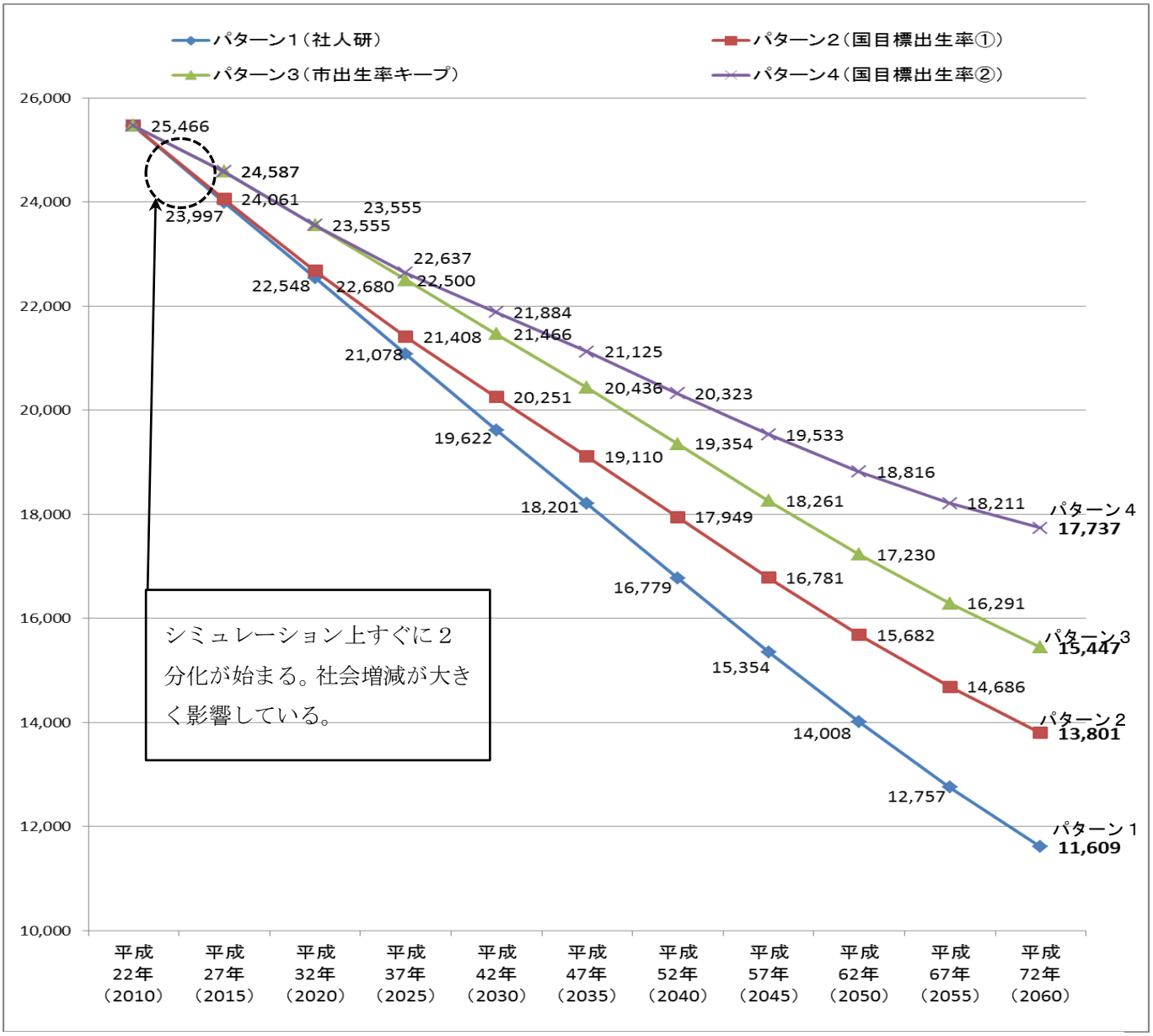
③パターン３（推計人口＋出生率キープ）

平成 24（2012）年度の勝山市の合計特殊出生率 1.53 を平成 72（2060）年まで維持し、なおかつ社会増減（転入・転出）が全くないと仮定した場合

④パターン４（推計人口＋出生率上昇）

パターン２の出生率で、社会増減（転入・転出）が全くないと仮定した場合

勝山市の将来推計人口（４パターン）



資料：平成 22（2010）年は国勢調査、平成 32（2020）年以降は国立社会保障・人口問題研究所
日本の地域別将来推計人口（H25.3.27）を使用

平成 72（2060）年までの人口推移を、前述の４パターンでシミュレーションを行いました。

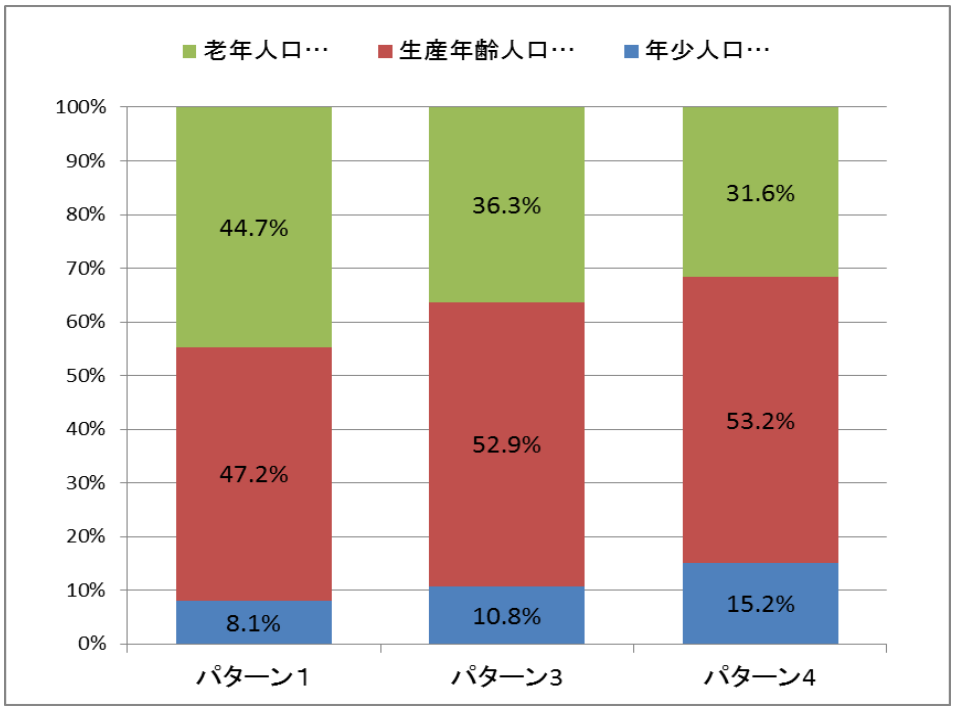
結果として、合計特殊出生率が国の目標である 2.07（2030 年以降）まで上昇（パターン 2、パターン４）したとしても人口減少は避けられない状況です。

パターン １・２とパターン３・４では、シミュレーション開始時点から２分化が進みます。この差はパターン３・４が社会増減（転入・転出）がないと仮定しているためであり、勝山市の人口減少の大きな要因は転出超過による社会減であることがわかります。

国立社会保障・人口問題研究所の推計値（パターン１）では平成 72 年時点での高齢化率は 44.7%に達しており、この状況では市内の経済活動および行政・住民サービス提供にも深刻な影響が出ると推測され、１自治体としての機能を維持することも困難な状況になると考えられます。

人口減少は避けられないとしても、シミュレーションのパターン４程度の年齢３区分別人口比率（高齢化率 31.6%、生産年齢人口 53.2%、年少人口 15.2%）を維持する施策が必要です。

勝山市の年齢３区分別人口比率推計（平成 72 年）



資料：前ページのシミュレーション結果より

14. 人口減少問題に取り組む基本的方向性

人口減少問題への対応について基本的な方向性としては、国の長期ビジョンで掲げられているように出生者数を増加させ、将来的な人口構造そのものを変えていくことがまず一つあげられます。

もう一つは社会動態である転出者を抑制し、転入者を増やすことであり、この 2 つを同時並行的に進めることで人口減少にある程度の歯止めをかけることができると考えられます。

そのために今後必要とされる視点としては、次の２点が挙げられます。

①若い世代の雇用創出・就労支援、

20 代から 30 代の若い世代の転出を抑制することと、Ｕ・Ｉターン人口を増やすために、まず、若い世代の希望がかなえるため、新たな雇用の創出・確保など、就労支援体制の充実および若い世代へアピールする情報発信が必要です。

②結婚、子育て、教育を支援する生活環境基盤の整備

勝山市はこれまで、県内でもトップクラスの手厚い子育て支援策を実施してきました。今後もさらなるニーズに応えるため、結婚・出産・子育てへの支援策をさらに充実させ、また市内外へ勝山市の優位性をＰＲしていくことが必要です。

そして、誰もが安全・安心に暮らせる生活環境基盤を整備していくこと、また、子どもの頃から勝山市に対する愛着を育む教育も重要です。

なお、人口とともに減少する勝山市内の需要を補うために、交流人口の増加に努めていく必要もあります。